令和３年度 第２回近江の地場産業および近江の地場産品の振興に関する施策推進協議会における主な意見

日　時：令 和 3 年 11 月 26 日（金）
１０：００～１１：００
場　所：オンライン会議

議題
（１）近江の地場産業および近江の地場産品の振興に関する基本的な指針（原案）について

２　主な意見
議題（１）近江の地場産業および近江の地場産品の振興に関する基本的な指針（原案）について

・事務局より資料に基づき報告と説明。

・食品は賞味期限がありどんどん作ればよいというものではない。国や県からの支援を活用し、生産調整してロスの無いようにしていくこととコロナが落ち着いたことを見据えて工場整備や後継者育成、商品開発に注力していかないといけない。海外のほうもコロナでストップしていたが再開の兆しもある。「安全・安心・美味しい」が大事。さらにはSDGsにも取り組んでいる。食品はどこも大変だと思うが、切磋琢磨してやっていきたい。

・ウッドショック木材がなかなか手に入らない。国産材もそれに引っ張られて値上げしている。県の事業で木製遊具の貸出を行っているが、先生の反応は「国産材でこういうものが作れるのか。海外製のものとしかないと思っていた。」という感じ。国産が少し高いが。また、若手の後継者の方が家業を継いでいるのもあるが製材だけで生計を立てられない人もいる。

・コロナで状況も見えない中で東京のアンテナショップをめぐっていた。
県によって売り方がうまくいっていたりうまくいっていなかったりの印象がある。デザインだけの問題ではなく、複合的な問題。
飲食も苦しいが、うまくどう脱却するかどうシンプルにしていくかが大事。

・伝統工芸、老舗企業を研究しているなかで、顧客の世代交代をどうするかも問題となっている。グローバル化している中で日常に商品の文化が継承されなくなってくる。これ

は個々の企業や組合でどうにかなるものではない。社会規模で意識を変えていかないといけない。SNS を含めどのように盛り上げていけるか考えている。

・高齢化が進んでおり後継者不足。需要が減っているため、仕事が減っている。若い担い手があっても受け皿がないため悪循環となっており、ここ数年深刻化している。まったなしの課題。
観光との連携について、弊社は５年前から伝統工芸の体験や工房見学などを行い観光客の受け入れを行っている。見てもらうだけなら誰にでも PR できるため、観光に生かして仏壇から派生した商品を買ってもらえると。観光の一躍となればという思いでやらせてもらっている。
仏壇は甲冑のルーツでもあるので、組合では甲冑を製作・販売している。

・琵琶湖にしかいない魚がある。販路拡大ということでは、地場での消費拡大も大事。

・繊維もコロナで非常に厳しい。長浜縮緬は和装主体だったことがネックとなっており、和装全体でいろいろ取り組んでいるが難しい。弊社では広幅化してアパレルの開発を行っている。シルクは洗濯できないこともあり、カジュアルな生活に使えないが、ウォッシャブルシルクの実用化の目途がたってきた。
湖東産地高島産地では早くから洋服の世界へ転換している。
多くの浜縮緬の会社は小幅ばっかり織っているので、広幅が織れるのは２社程度。浜縮緬に拘らず加工業もやっていきたい。世界に向けてお役にたてる産業になっていきたい。

・米や野菜お茶牛肉や牛乳も右肩下がり。事業承継が重要な課題と認識しており、いつかやらないといけない「いつか」が先延ばしになっている。経営ノウハウが十分に引き継がれない。黒字なのに廃業されるところもある。行政と民間が一体となって事業承継計画まで作っていかないといけない。

・東京に行った際に、各県のアンテナショップをはしごしている方もいた。県産の物品を買うだけではなくて旅行の予定を立てているシニアご夫婦もいた。